

カリヨウど

菖蒲

でんせつ

民話



その① 菱ヶ岳の雪崩

春三月、南風が吹くころになると、菱ヶ岳の頂上附近から決まって雪崩がふもとに向かって出る。その雪崩について色々なことが言われている。

雪崩がふもとに下るにしたがつて広がるのは、末広がりといつて豊作のしるしであると言われている。

雪崩が菖蒲の村の方へ向かってつくと、その年は菖蒲の村に色々な災難があり

須川の方へ向かってつくときは、災難はないと言われている。

菱ヶ岳の雪崩のつく現場を見た者は

その年に何かの災難に遭うというので、恐れられている。



その② かたくり

のやま ゆき き き めくさ め で はる ひ
野山の雪も消え、木の芽草の芽も出て、春の日がぽかぽかと暖かいある日

しょうぶ す わじんじや かみさま のやま さんぽ で
菖蒲の諏訪神社の神様が、野山に散歩にお出かけになつた。

うつく はる のやま けしき み
美しい春の野山の景色にうつとりと見とれながらいておられた時

くさ め ふ ひょうし すべ まえ
草の芽を踏まれた拍子に、つるりと滑つて前のめりに転んでしまわれた。

とき なに くさ は め
その時、何かの草の葉で日をいやというほど突いてしまわれた。

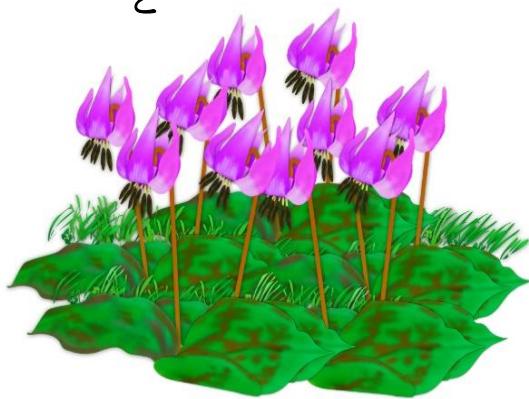
かみさま め いた いた
神様は目が痛くて痛くて、しばらくは起き上がるこどもできず

ころ いた め お
転んだまま痛い目を押さえて、痛さをこらえておられた。

いた うす お
ようやく痛みが薄らいできたので、何が俺を滑らせ

なに おれ め つ おも
何が俺の目を突いたのだろうと思つて、目を開けてごらんになると

あた いちめん はえ ふ すべ
その辺り一面に生えているカタクリを踏んで滑り



春の生氣を吸つて伸びはじめた麦の葉先で目を突いたのでした。

神様はたいそう怒られて、カタクリに向かつて

「お前のために俺は滑つて転んで目を突いて、痛い目に遭つたから

お前のようなものは、もう菖蒲の土地に生えるな」と言い

麦に向かつて「お前がそこに生えていなれば

俺は目を突いて痛い目に遭うことはなかつたのだから、お前も菖蒲の地に生えるな

と言い渡したという。それからカタクリは、菖蒲の土地に生えなくなり

麦も育たなくなつたという。

今も不思議なことに、諏訪神社から上手の方は県境まで

菖蒲の土地にはカタクリは、一本も生えていなく

また、麦は作つてもどうしても育たないから、麦作りはしないと村人は言つている。

その③ 蛇紋竹

昔、蒲生の池の主に一人の娘があった。この娘が年頃になつたのでこの娘に良い婿をと、方々を訪ねると
野々海の池の主に立派な息子がいるという話を聞いて
鼻毛の池の主に仲人を頼んで行つてもらつた。
すると、野々海の池の主の言うには
「蒲生の池は村の下にあつて、ごみが流れ込むごみ池だから
あんな池に息子をくれることはできない」と言つて馬鹿にした。
それを聞いた蒲生の池の主は、非常に腹を立てて、とうとうけんかを始めた。
鼻毛の池の主も、蒲生の池の主に応援した。

蒲生の池の主は、水梨のある家から刀を一振り借り

鼻毛の池の主は、浦田の小坂という家から刀一振りと

尾先が切つてあつた白馬一頭を借りて、それに乗つて出かけ、野々海へやつてきた。

野々海の池の主もそれがあることを悟つて、下船のおやけという家から

「勝てばお礼に黄金の延べ棒をやるから、女どもには決して話してくれるな」

と頼んで、刀を一振り借りてきていた。

野々海の池の端へ着くと、蒲生の池の主は、鼻毛の池の主に

「俺が池の中に入つて戦うから、あなたはこの池の端にいて

赤い波が浮いてきたら刀で切り、白い波が浮いてきたら

しつかりやれと応援してください」と頼んで、池の中へ飛び込んだ。

そうして、刀を抜いて切りあいを始めたが、勝負はなかなかつかない。

しかし、だんだん野々海の池の主は負け戦になってきた。

野々海の池の主は「こんなはずはないのだが、さては

黄金の延べ棒の話を女どもに言つたに違ひない。残念だ」と叫んだ。

鼻毛の池の主が池の端にいると、赤い波、白い波が浮いてきたので

蒲生の池の主の言つたように、赤い波は刀で切り、白い波には応援していた。

そのうちに野々海の池は、赤い血でいっぱいになつた。

野々海の池の主や家族は、蒲生の池の主に切り殺されてしまつたのでした。

やがて、蒲生の池の主は池の中から上がつてきて、戦いに勝つたことを喜び

鼻毛の池の主に応援を感謝して、凱旋した。

野々海の池の赤い血は、西口から三日三晩も流れ、保倉川を真っ赤に染めたという。

その時、血しぶきのかかつた竹が今でも『蛇紋竹』といつて

美しい模様の付いた竹は、保倉川沿岸の名物になつてゐる。

この戦いがあつた後、野々海の池には子どもが一匹残されたといふことが分かつて

蒲生の池の主も鼻毛の池の主も、かたき討ちをされることを恐れ

どこかへ姿を隠してしまったので、蒲生の池はあせて田んぼになり

鼻毛の池もあせて、水を払えば底が見えるようになつた。

野々海の池も、主の子どもがよそへ行つてしまつたので

あせて草が生えたり、小さい木が生えるようになった。

この池は現在、長野県の耕地の用水ダムになつてゐるが

十七歳の少女が夜の丑の刻に、あかがねの鍬で三くわうなえば

昔のような池になるという言い伝えがある。



その④ しひつたれ

保倉川の上流、県境に近い菖蒲の地に『しひつたれ』という所がある。

昔、湯の神がその『しひつたれ』にやつて來た。

場所は沢だが滝があり、水は清く、量はたくさんあるので

ここに温泉を出そうと思つて、その近くにいた村人に

「ここは、何という名の場所か」とお聞きになつた。

村人は「ここは『しひつたれ』という所です」と答えた。

湯の神は「ここは名前が悪いから、ここに温泉を出すのはやめよう」と言つて

また歩いていかれました。『しひつたれ』という良い名でなかつたので

湯の神に見放されてしまつたのです。

湯の神は途中疲れたので、見ると、畳十三畳も敷かれるような大石があつたので

それに腰掛けで休んで疲れをなおして、また出かけ
山を越えて松之山の方へ行かれ、松之山で湯を出されたという。

湯の神が腰かけて休んだという大石は、今もあつて
湯の神が腰かけたというので、いつでも、温つたようになつているということです。



その⑤ 龍摺石

菖蒲から浦田へ越える道を登つて行くと、小川の端に龍摺石という石がある。昔、この辺りは眺めのいい場所なので、龍がここに住み家を作ろうと思つて天から降りて来たが、降りてみると狭い場所でとても住むことができそうもないのに、再び、天へ舞い上がつて行つた。その舞い上がる時、龍が尾でそこにあつた石を摺つて、石に穴をあけて臼のようにして行つた。その穴には、いつも水が絶えないと言われていた。それでこの石を、龍摺石というようになつたという。

菖蒲の『おやじ』という家のずっと前の方が
その石が珍しいから庭石にしたいと思い、大勢の人を頼んで

その石を動かそうとしたが、なかなか動かない。

そして空がかき曇つて暴風雨となり、幾日も荒れる日が続いたので
石を動かして運ぶことをあきらめて、その仕事を止めると
空は晴れ上がって、良いお天気になつたということです。

上越市大島区菖蒲の地には、いろいろな伝説があり
昔の話を今に伝えていますが、時がたつにつれて
この懐かしい伝説を知る人が、だんだんと少なくなつてきています。
ここでは、菖蒲に伝わる伝説を、五話だけ紹介しました。
伝説の中には、一つで色々に語り継がれているものがありますが
旧大島村立菖蒲小学校に勤務（昭29～38）し
当時の人の話や資料を見て、各方面から考察し
その中で最も正しいと思うものを「郷土の伝説を拾う」として
収集してくれた、山岸文作氏の資料を基に掲載しました。（s）

